

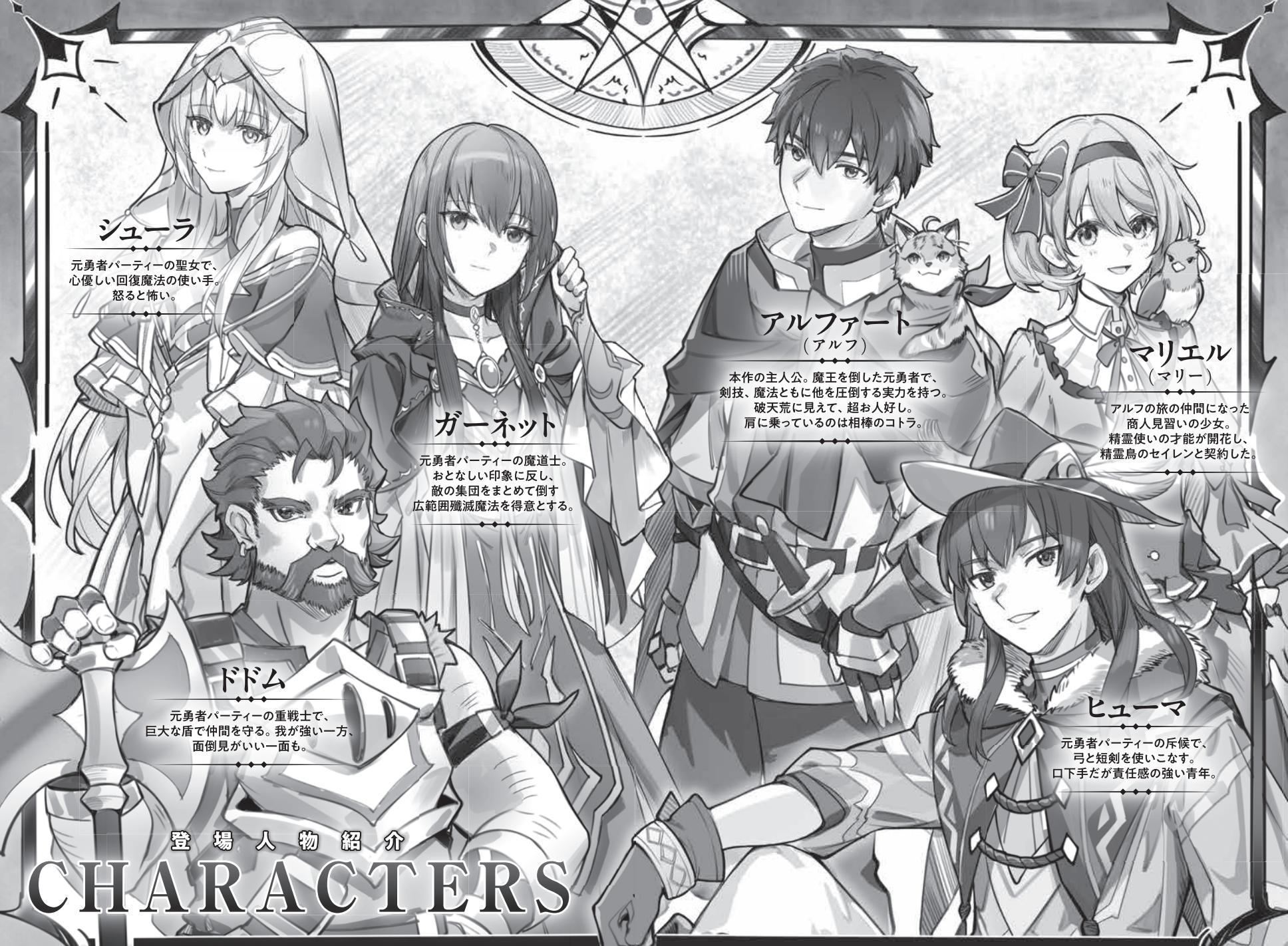


魔王のいない世界に 勇者は必要ない そうです

3

Mugen no Tsubasa

[著] 夢幻の翼 [絵] Csyday



シェーラ

元勇者パーティの聖女で、心優しい回復魔法の使い手。怒ると怖い。

ガーネット

元勇者パーティの魔道士。おとなしい印象に反し、敵の集団をまとめて倒す広範囲殲滅魔法得意とする。

ドム

元勇者パーティの重戦士で、巨大な盾で仲間を守る。我が強い一方、面倒見がいい一面も。

アルファート
(アルフ)

本作の主人公。魔王を倒した元勇者で、剣技、魔法ともに他を圧倒する実力を持つ。破天荒に見えて、超お人好し。肩に乗っているのは相棒のコトラ。

マリエル
(マリー)

アルフの旅の仲間になった商人見習いの少女。精霊使いの才能が開花し、精霊鳥のセイレンと契約した。

ヒューマ

元勇者パーティの斥候で、弓と短剣を使いこなす。口下手だが責任感の強い青年。

登場人物紹介

CHARACTERS

「——このあたりで少し休憩しようか」

ダクトの町を出発してドワルゴ国方面へ進む途中。

街道の傍そばを流れる小川に気付いた俺——アルフはマリーにそう提案した。

「そうですね。小川もちようど浅瀬になつてているところがあるので、馬に水を飲ませるのにいい場所だと思います」

普通の行商馬車ならば、一樽分程度は馬に飲ませる水を載せて移動するのが常識だ。

長い道のりを進む際、今回のように街道沿いを小川が流れていることはそう多くない。

そのため、活動に多くの飲み水を必要とする馬には、機会があれば時間を割いてでも水を与えておく。それが馬を大切に扱う行商人の心得だ。

「別に急ぐ旅でもないから、ゆっくり休むといい。あたりを調べたが特に危険な気配はなさそうだ」

俺の言葉に頷うなづいたマリーは、馬車を停めて荷車から馬を外すと、小川の浅瀬へ誘導して水を飲ませる。その姿はもう立派な行商人に見えた。

「綺麗な小川ですね。魚も元気に泳いでいます」

水を飲む馬の傍で屈んで水辺を眺めるマリーが、微笑みながら言う。

『なんだ？ 捕まえたいのか？』

馬車の幌上で羽を休めていた精靈鳥——セイレンが、ふわりとマリーの傍に飛んできて馬の背に

止まり、念話で言った。セイレンが自重を消しているせいか、馬は気にせず水を飲んでいる。

「このあたりは自然も豊かで気候もいいようだ。マイルーンが農業国と呼ばれる所以だろう」

「そうですね。ですが、この先にあるドワルゴは食料不足なのですよね？」

「ギルドで聞いた情報だと、もともと鉱業で栄えた国で、食料の生産力は乏しいということだ。それ

に加えて、最近は日照りなどによる農作物の不作が響いているらしいな」

馬は俺たちの話を聞くように耳をぴくぴくさせながら、ゆっくりと水を楽しんでいる。

そんな風景に笑みを浮かべながら、俺は濃厚だったここ半年余りの出来事を思いだしていた。

勇者であつた俺は、魔王討伐後に国王の度量の狭さから少ない報酬しか与えられなかつたため、祖国に見切りをつけて自由な旅に出た。

そして、路銀を稼ぐために護衛依頼を受けた行商人の少女マリーと共に、多くの国や町を巡る旅を経て、彼女の唯一の肉親・叔母リリエルの元へと辿りつく。

そこでマリーとは別れるはずだったが、彼女は行商人だった父の背中を追うべく、俺と共に世界

を巡る決断をした。

その後、俺たちは元勇者パーティーメンバー・斥候のヒューマに会うため、大森林の隠れ村を訪れる。そこでマリーの秘めた才能が開花。精靈鳥セイレンとの契約を果たし、祝いの宴が開かれた。

しかし、事態は急展開を迎えることになる。

里の守り神である神木の精靈ルーンが、魔王の幹部だった魔族グルゲルグに捕らえられてしまつたのだ。

ヒューマからの願いもあり、俺は精靈ルーンの救出に向かうことを決意。

戦力の補強に、温泉宿で知り合つたAランク冒険者のコネン、依頼で出会つた有能な御者兼護衛ガーネットを仲間にし、激闘の末、グルゲルグを倒すことが出来た。

しかし、魔王を倒したはずの世で、いまだ魔族の力が衰えていない事実に驚きを持つと共に、ある疑問が脳裏を過った。

『もしかすると、俺たち人族は魔王の存在に関して大きな勘違いをしているのではないか？』と。

それから、俺たちは食料難だというドワルゴ国の様子を探るため、旅を続けていたのだった。

「ありがとうございます。セイレン。でも、今はいいです。魚を捕まえるために水辺に魔法をかけたら、水を飲んでいる馬が驚いていますから」

俺が考えをまとめきれないでいると、それを上書きするようにセイレンに対するマリーの優しい

返事が聞こえてくる。その声に俺は考えることをやめ、マリーとセイレンのやり取りへと意識を移したのだつた。

「魚が食べたければ俺の収納に入っているぞ」

せつかくの休憩なので、少し早いが食事をするのもいいかと思い、以前、古代遺跡の地底湖で捕まえた一角獣魚を捌いて出してやる。

するとそれを見て、猫の姿をした俺の使い獸魔のコトラが馬車から飛び降りてくるのが見えた。

「昼食の準備をするから、マリーも終わつたら来てくれ」「はーい。分かりました」

俺は俺だけが使える、無尽蔵で内容物が決して劣化しない収納魔法から、テーブルセットといくつかの食事を取りだして並べていく。

こんな非常識な風景は他人には見せられないなと思いながら準備をしていった。

「——食事の準備をすべて任せてしまつてすみません」

ちようど準備が終わつたタイミングで、馬を木に繋いだマリーがこちらに顔を出しながら謝る。

「役割分担だ。そんなことより食事を楽しもう」

俺がマリーに告げると、彼女は笑顔で頷く。そしてそこに並べられたものを見て、ため息まじりに言つた。

「相変わらず凄い光景ですね。旅の途中の食事を、作りたての状態で、しかもしつかりとしたテー

ブルで食べるだなんて聞いたことありませんよ」

ため息をつきながらきちんとテーブルにつくマリーに、俺は思わず笑つてしまふ。

俺の旅に同行するならば慣れてもらうしかないと考え、別の者が見ていない時にはこうして常識に囚われない行動を許容してもらえるようにと話し合つた結果だつた。

「そうかもしれないが、やはり旅の間でも美味しい飯を食べたくなるのは仕方ないだろ?」

「まあ、食事は美味しい方がいいのは同意しますけど、テーブルセットまで準備するなんてやりすぎですよ。もしも、このタイミングで別の商人の馬車が通りかかつたら、絶対に変な目で見られるでしようから」

街道での食事は誰かに見られる可能性があると苦言を呈しながらも、マリーは出された料理をしつかりと完食していた。

□ではああ言つていたが、携帶用保存食と比べるまでもないことは、彼女自身もよく分かっているようだ。

「——ごちそまでした」

食事を終えたマリーは、鞄からダクトで仕入れた地図を取りだしてテーブル上に開くと、これらの行動方針の確認をする。

「ここから先、ドワルゴ国との国境砦までの距離は、馬車で四日から五日。途中に小さな中継村がありますので、その日は宿泊が出来ると思います。ですが、それ以外の日は野営をすることになります」

りますね」

「そうだな。まあ、既に何度も野営は経験しているから、特に気にする必要はないな」

『なーに、我が主の安全は保障してやるぞ』

「そいつは頼もしいな」

俺たちの話をマリーの肩で聞いていたセイレンが、ドヤ顔でそう言つた。

「にやつ、にやつ」

セイレンの言葉を理解したのか、コトラも声を上げて主張してきた。

「ああ、コトラも頼んだぞ」

しばらく旅を共にしてきたおかげか、最近のセイレンとコトラはお互いの領域を侵さないよう共存しているようだ。まあ、時々だが食事の取り合いバトルをすることがあるが……。

「まずは今夜の野営ポイントまで進まなくてはな。そうすれば明日は中継村へ辿りつけるだろう」「そうですね。じゃあ、そろそろ出発しましようか」

マリーはそう言って椅子から立ち上がり、木に繋いでいた馬を迎えに歩いていく。
それを見ながら、俺は取りだしたテーブルセットを収納に仕舞い込んで、コトラたちと一緒に馬車へと乗り込んだのだった。

「——おそらくここだな。近くで水を確保出来ることと、馬車を複数台ほど停められる広さがある

からな」

俺は地図を見ながらそう言つた。

ギルドが有償提供している地図とはいえ、詳細なものではなく、特徴的な目印が記載されている程度なので、結局は各自がその目で見て判断するしかない。

それでも地図があるとないとでは、リスクは雲泥の差だと言えるのだが。

「久しぶりの野営ですね。最近はギルドで研修を受けたり、セイレンの故郷にお邪魔させてもらつたりと旅から離れていましたので、なんだか緊張しちゃいます」

実際は精霊の森や遺跡の探索などで移動も多くこなしていたのだが、マリー的には行商の一環としての旅は別物なのだろう。ただ、緊張すると言いながらも、嬉しそうな表情を見せてくれる。
「まあ、心配しなくてもいい。俺はもちろんだが、コトラに加えてセイレンもいる。そのへんの獸や盗賊程度なら速攻で返り討ち確定だからな」

俺はマリーを安心させるようにそう言うと、野営の準備を始めるのだった。

◇◇◇

「——おはようございます」

翌朝、マリーはまだ日が完全に顔を出していない間に起きてくると、

不寝番をしていていた俺に声

をかけてくる。

「ああ、もう起きたのか。どうだ？ よく休めたか？」

「はい。コトラちゃんが傍にいましたし、セイレンもテントの上で休んでいましたので。アルフさんはずっと起きていたのですよね？ 今から少しでも仮眠をとられてはどうですか？」

「そうだな。見張りをコトラに任せて、少しだけ休ませてもらうとしよう」

一夜程度の見張り番は冒険者をしていればよくあることだが、移動中に眼気がきてしまっては元も子もない。

俺は今まで寝ていたコトラに見張りを代わるように指示を出してから、焚火の傍にシートを出してごろ寝をする。何かあればコトラがすぐに叩き起こしてくれるだろう。

「おやすみなさい」

マリーの声を聞いて、俺は目を瞑りひと時の休息をとる。

やがて眼瞼から醒め、目を開いた時には、隣で腰を下ろすマリーが微笑んでいるのが見えた。

「まだ寝ていなくて大丈夫なのですか？」

笑顔の中にも俺を心配するマリーの言葉が胸に響く。

誰かに心配されながら旅をするのも、一人では味わえない感覚だと思わず笑みがこぼれた。

「どうかしましたか？」

俺の表情を見たマリーが、小首を傾げながらそう問いかけてくる。

「いや、ありがとう」と返して、俺はゆっくりと立ち上がり大きく伸びをした。
「はい。どういたしまして？」

マリーは俺の返答の意味が理解しきれていないようで、語尾が上がっていた。

「中級回復魔法」

俺は自らに回復魔法をかける。怪我の治療とは違うが、多少なりとも疲労の回復も見込めるからだ。

「さあ、朝食を食べたら出発しようか」

そう言つて収納からパンを取りだすと、マリーに手渡したのだつた。

「あ、見えましたね。あれが中継村のようです。えっと、ギルドの情報だと村の名前はハザードと言ふようですね。あと、小さな村のようで、宿屋が一軒だけあると記載されていました」

囲う柵も木材を加工したものなのだろう、町を繋ぐ小さな村らしく簡素に造られているようだ。

「小さくとも国が管理している村だ。ゆっくり休める宿だろう」

「そうですね。それと、ギルドの支部もあると思いませんので、ドワルゴ国の話が聞けるといいで

すね」

マリーはそう告げる、手綱^{たづな}を握り直して馬車を進める。

やがて俺たちは村の門へと辿りつき、門兵に商人の証^{あかし}を提示して村へと入った。

「まずは宿の確保ですね。一軒だけなので選択の余地はありませんが」

マリーは御者台から村を見渡して宿を探しながら、ゆっくりと大通りにそつて馬車を進ませる。

やがて、村の中央付近に建つ宿屋を見つけた。他の町の宿に比べると規模は小さく、少し大きな商隊が泊まれば満室になるのではないかと思える程の建物だった。

俺たちは馬車を宿の裏手にある施設に預けると、宿のドアを開ける。

「いらっしゃいませ。お泊まりですか？」

宿に入るとすぐに女性店員が対応してくれた。

「ああ。二部屋ほど頼めるか？」

女性店員の問いに俺はそう返す。部屋数は少なそうだが、今はそう多くの客が泊まっている様子はないので大丈夫だろうと、別部屋を選択する。

「可能ですが、よろしいでしょうか。一人部屋だと割安になりますよ。一緒に旅をされている方ですか？」

「確かにそうかもしれないが、野営ならばともかく、宿に泊まるときはお互いやつくりと休みたいものじゃないか？ 部屋は空いているんだろう？」

緊急の時以外はきちんと別部屋を取ると決めているのだが、わざわざそこまで店員に教える必要もないからと、俺はそれらしい適当な理由を述べておく。

「私は別に二人部屋でも構わないですよ？」

話を聞いていたマリーは俺だけに聞こえる声で伝えてきたが、俺はそれを手で制する。続けて、受付嬢に再度二部屋でと念を押した。

「——分かりました。ではそのように手続きをいたしますね」

女性店員は俺の言葉に頷いてから、宿帳^{ゆきば}に記載をすると鍵をふたつ手渡してくれる。

「ありがとうございます」

俺は女性店員から鍵を受け取ると、片方をマリーに手渡す。

「マリー。食事を先にすませておくか？」

「そうですね。手持ちの荷物もそう多くありませんし、いい時間ですからそうしましようか」「決まりだな。ああ、すまないが食事の準備をお願いしてもいいだろうか？」

俺は女性店員にそう告げると、傍にある椅子に腰を下ろしたのだつた。

「——お待たせしました。ステップは熱いので気を付けてお召し上がりくださいね」

そう言いながら女性店員が持ってきた料理は、パンに葉物野菜のサラダ、メインの肉と熱々のステップだつた。

「飲み物は果実水でよろしかつたのですよね？」

「ああ、それでいい」

旅の途中なので今夜も酒は控えておく。そんな俺の表情を見て、マリーがクスクスと笑いながらもお礼を言つてくる。

「私のために我慢してくれてありがとうございます。ですが、今は私の護衛依頼中ではありませんので、アルフさんの判断で飲まれても大丈夫ですよ」

「いや、これは俺の中で決めたルールだ。一度破るとグダグダになるから、ちゃんと線は引いておかないと。お、この肉は美味しいな」

思わず気持ちが揺れそうになり、少し誤魔化し氣味に答えた俺だった。

そこでふと、食堂に俺たちしかいないことに気付き、女性店員に問いかけてみた。

「俺たちしかいないみたいだが、いつもこの時間は少ないのか？」

俺の言葉に女性店員は一瞬だけ表情を曇らせて口ごもるが、ゆっくりとその理由を話してくれた。「この村は、ダクトの町とドワルゴ国との国境砦とを繋ぐ中継村の位置づけですので、そこを往来する商人や旅人の方がいなければ商売は成り立ちません。もともとは農業が盛んなマイルーンから鉱山資源が豊富なドワルゴ国へ穀物を届け、その帰りに鉱物を買って帰る商隊が多く通っていたのです。ただ、このところ街道沿いに魔物や盗賊の目撃情報があつて、商隊の往来が激減しているようなのです」

俺はダクトの町で聞いた話を思い出す。

「魔物の目撃情報はダクトのギルドで聞いたが、盗賊も出ることがあるのか？」

「はい。数日前にも、ダクトからドワルゴ国へ向けた商隊が盗賊に襲われて、荷物を奪われたそうです。私もお客様から聞いただけですので詳細は分かりませんが、ギルドに行けば聞けると思います」

「そうか。貴重な情報をありがとう。明日、出発前にでも顔を出してみることにするよ」

俺がそう礼を言うと、女性店員は「どういたしまして」と言つてお辞儀し、奥の部屋へと戻つていったのだった。

翌朝、俺たちは宿で聞いた噂の真相を探るために、冒險者ギルドを訪れていた。

「——冒險者ギルド・ハザド支部へようこそ。どういつたご用件ですか？」

ギルドは村の規模に見合った大きさで、町のギルドの受付窓口が平均で五つ程あるのに対しても、このギルドには一つしかなかつた。

その唯一の窓口で笑顔を振りまきながら問いかける受付嬢に、俺は宿屋で聞いた噂について情報を求めた。

「ああ、やっぱり噂は広まっているのですね。少しあ待ちください」

そう前置きをした彼女は、数枚の書類をカウンターに置いて説明してくれる。

どうやらこのあたりの地図のようだが、いくつか印がつけられている。

「これは、ハザド村から国境砦までの地図です。ここに記されている箇所で、魔物の目撃情報が上がっています。そして、この二重丸が記されている箇所では、盗賊の襲撃があつたとの情報がありました」

「魔物はともかく、盗賊に襲撃されてよく無事だつたな」

「荷物を捨てて、助かるなどを優先したそうです。盗賊たちも荷物の強奪^{さうだつ}が先決だつたようで、危険を冒してまで護衛たちと戦闘するのを避けたようですね」

「そうすると、ギルドに報告が行くことは自明だから、活動場所は移動しているだろうな」

「はい。ギルドの上層部もそう見えています。ただし前回、商隊が襲撃されてからドワルゴ方面へは商隊馬車は向かっていませんから、十分に警戒^{けいかい}してくださいね」

受付嬢はそう言って、警戒が必要な時だからと、普段なら有料の地図情報を無料で書き写させてくれたのだった。

「——しかし、魔物に盗賊か。魔王を倒したというのに魔物の出現がなかなか減らないようだし、その上で盗賊の出没^{しゆぼつ}が増えているとは困ったものだな」

「その盗賊は、以前捕まえたあの集団と関係があるのでしようか?」

「ん?『闇夜の宴^{やみよ ゆうたけ}』か? それは捕まえてみないと分からぬが、可能性としては十分にあると

は思うぞ。奴らは広域で活動していると聞いているからな」

ギルドで情報を得た俺たちは、そんな話をしながら急ぎドワルゴ国の国境砦へ向けて馬車を走らせていた。

距離的に、どうあっても道中の野営は避けられないが、危険の少ないとされる野営場所まで進んでおきたかったからだ。

——ガラガラガラ。

馬車を進ませながら、俺はあたりの状況を注意深く探るが、これといって危険なものは検知出来ない。嵐の前の静けさだろうか。

その後、心配していた野営時の襲撃もなく、一人してほつとする。

しかし、時間短縮に朝食を簡易なもので済ませ、出発の準備をして馬車に乗り込んだその時、セイレンが警告を発した。

『何かよからぬ魔力を感じるぞ——』

そう言われた俺は、これから向かう街道へ向けて探索魔法の範囲をズイと引き伸ばすが、危険な感じのものは検出されなかつた。

『気のせいではないんだな?』

『ふむ。そう言わると自信が揺らぐな。実際に見てこようか?』

セイレンがそう言って、馬車の幌からふわりと飛び上がる。

「いや、何かがあつた時に離れていては初動が遅れる。俺も再度探索魔法を展開して調べるから、セイレンも今よりも確実な感覚があれば教えてほしい」

俺がそう告げるど、セイレンは『分かった』と言つてゆつくりと幌に舞い降りるのだった。

「念のため、ここからは慎重に進むとしよう」

野営場所を出発し、あたりを警戒しながら目的地へ向けて進む。

その後、野営場所から砦まで半分を過ぎた頃だろうか。俺の探索魔法に反応があつたと同時に、セイレンが再び警告を発した。

『やはり、何かがおるな——』

「ああ、俺の探索魔法にも反応があつた。馬車が何かに襲われているようだな。ハザド方面からは馬車は出ていないらしいから、砦側から来た馬車かもしれない」

『どうするのですか？』

マリーが俺とセイレンの会話を聞いて、心配そうに問いかける。

「どちらにしても、この先の道のことだ。向かわないという選択肢はないな。それに、こちらにはコトラに加えてセイレンもいる。相手が上級魔族でもない限り対応出来るだろう。だが、急いだ方がいいかもしない」

俺はそう言つて、マリーに少し速度を上げるように指示する。

やがて遠目に見えてきたのは、行商用の馬車を囲う大勢の男たちの姿。馬車の前には御者その他に、護衛であるう二人の人影が確認出来た。

「あまりいい状況ではなさそうだ。馬車を囲んでいるのは盗賊だろうが、馬車に近すぎて範囲魔法は使えそうにない。セイレン、俺も走つて向かうが、間に合わないかもしれないから先に向かってもらつてもいいか？」

『構わぬ。あやつらをぶち倒せばいいのだな？ 主よ、また少しだけ魔力を借りるぞ』

セイレンはそう言うと、マリーの肩に降りて、彼女の魔力を使って巨大化する。

『では、行つてくるとするか——』

——ズズン！ ゴガシャツ！

セイレンが高く舞い上がるとした瞬間、馬車の方角から轟音が響き渡った。

「な、なんだ!? 奴ら、爆発物でも使つたのか？」

俺たちがその場所に注目すると、盗賊たちの半分近くが倒れているのが見える。あの護衛がやつたのだろうか?

「ウオターリード」
「水彗星」
「パワーハンマー」
「剛腕槌」

様子を窺うと、遠くで叫び声が響いた。強力な魔法が飛び交い、その間を縫うようにもう一人の身影が男たちに接触したかと思うと、相手は宙高く飛ばされて地面に叩きつけられていく。

たった一人で十人以上の盗賊をあつと言ふ間に沈黙させていく。かなりの手練れに見える。

「これは、下手に手を出そうものなら、盗賊に間違えられて攻撃されそうだ。セイレン、どうやら助力は必要なさそうだぞ」

『ふむ。つまらぬがそのようだな』

せつかく巨大化したセイレンだったが『ふん』と言つて、巨大化を解いてマリーの肩に舞い降りたのだった。

「こいつは凄いな。あれだけの人数に囲まれた状態で、全員無傷な上、馬車にも損害を出さないとは。いつたいどんな護衛なんだ」

盗賊たちが沈黙したのを確認した俺たちは、ゆっくりと馬車を進ませ、襲われていた馬車の傍までやつてくる。

盗賊を殲滅した護衛の二人は、その後始末のためまだ戻ってきていないようだ。

「やあ、災難だったな。そつちの馬車はドワルゴ国からマイルーンへ向かう予定だったのか？」しかし、いい護衛を連れているな。対処の仕方が見事だつたよ」

俺は御者をしている男に声をかける。男は少し驚いた顔をしたが、俺たちが盗賊の類ではないと認識すると、大きな息を吐いてから苦笑いをする。

「ああ、そりやあ当然だよ。この馬車は盗賊たちを捕まるために用意された、ダミー商会の馬車

だからな」

「ダミー商会の馬車ってことは、捜査をしていたということか。しかし、結構危ない橋だと思うが……」

俺がため息をつきながら御者の男性と話していると、盗賊たちを一掃した護衛の二人が戻ってきた。

「おう、こつちは片付いたぞ。思つたよりも歯ごたえがなかつたな」

馬車の陰になつて顔は見えないが、聞き覚えのある声に俺は思わずその名を口にだしていた。

「ドドム？」

「ん？ 誰だ、俺様の名前を呼ぶ奴は？」

低く太い声が特徴的な男は、その姿を俺たちの前に現す。

そこには魔王討伐の際に苦労を共にした、かつての仲間の顔があつた。

低身長ながら浅黒く日に焼けた太い腕。顔には立派な髭を生やした男で、一見して山賊の親分と言わざるも疑わない容姿だ。

「ひつ！」

その姿を見たマリーが思わず小さく悲鳴を上げる。その声を聞いたセイレンが、警戒態勢を取る

のが分かつた。

「おつと、待つんだ。この男は敵じゃない」

精靈魔法の準備をするセイレンを手で制した俺は、男に向かつて笑いながら再び名を呼んだ。

「やっぱりドドムじゃないか。となるともう一人はまさか……？」

そう言つて俺はもう一人の護衛の顔を見る。

「やっぱりウルリさんも一緒だったか。あの洗練された魔法を見れば、上級魔導士なのはすぐに分かったからな」

「どこかで聞いた声だと思ったらアルフじゃないか。お前、エンダーラに帰つて貴族にしてもらつたんじやなかつたのか？」

ドドムは突然の再会に驚いた顔をして、そんな疑問を口にする。傍に来たウルリも同様の疑問を持つていたようで、頷きながらも俺の答えを聞こうとこちらを見ていた。

「まあ、いろいろとあつてな。今は好きな酒を飲む旅をしているつてところだ。そんな時にダクトのギルドで『ドワルゴ国では農作物の不作が原因で食料が不足している』と聞いてな。同行している彼女が行商人だから、マイルーンでかき集めた食料品を運んでいる最中だよ。それで……食料、足りていないんだよな？」

俺たちの馬車がドワルゴ方面に向かつている理由を聞いたドドムは、ため息を吐きながらも肯定したのだつた。

「——しかし、正直言つて助かつた。もともとが四だつたから馬車には何も積んでいなかつたが、



さすがにこれだけの人数の盗賊は乗せられないからな」

隣を歩くドドムがそう言つてきた。

ドドムたちが一掃した盗賊たちは、運の悪かった一人を除いて全員生きていた。当然ながら、そのへんに放置していくわけにもいかないので、全員手足を縛って馬車で運ぶことになつた。

しかし、人数が多くてドドムたちの馬車だけでは全員は乗せられないとのことで、俺たちの馬車にも分散して乗ることになつたのだ。

俺はゆっくりと進む馬車の横を歩きながら、旧知の仲であるドドムと情報交換することに。

「……はあ。やはり、マイルーンからドワルゴへ食料が入らなくなつたのは盗賊のせいだつたか。

少し前から、ドワルゴでは『闇夜の宴』と名乗る盗賊団が各地に出没するようになつてな。討伐依頼は冒險者ギルドから出でていたが、なかなか戻尾^{しほ}を掴めなかつた。それで業を煮やしたギルドは、新たな戦略として廻馬車を考案したんだ。腕に自信のあるメンバーを募り、そのまとめ役として俺様とウルリが選ばれたつてわけさ」

ドドムが今回の廻査に関する経緯を語る。

それから会話が一段落すると、気になつていて話を振つてみた。

「ところで話は変わるが、前の依頼を完遂したあとに国からの褒賞^{ほうしょう}はもらつたか？」

「ん？ 俺様は今回の功績を認められて、国の騎士団長に就くことを打診されたよ。だが、俺様に団をまとめるカリスマがないのは自分が一番よく分かつている。だから、それは辞退して、代わり

に俺様の得意分野である鍛冶^{かじ}が出来る鉱山の町、コーヴの自治権をもらつた」

「鉱山採掘で有名な町の自治権か。鍛冶師の適性を持つドドムならではの判断だな。しかし、肝心の自治は大丈夫なのか？」

ドドムの腕っぷしが強いのは知つているが、町を治めるための頭脳が人よりも優れているとは思えないのだが……。

「ああ、心配するな。実際の自治はちゃんと代官をつけてやらせている。俺様が欲しかつたのは鉱山で自由に採掘出来る権限と、鍛冶師ギルドを掌握^{じょうわ}することだけだ」

「まあ、妥当な判断だな」

俺が素直に感心していると、ドドムの隣を歩いていたウルリも近況報告してくれる。

「私にも同様に魔導士団長にならないかと打診してきたのですけど、いくら魔法力が高くても、女である私が団長に就くことをよく思わない古臭い人も多くてね。とてもではないけどそんな環境に身を置くのは嫌だつたから、私も辞退してお金の報酬をもらいました。そのお金を元手に、コーヴの町で魔導士の育成学校を始めたの。お金がなくて正規の学院には通えないけれど、才能がある子供はいる。そんな子供たちに教えるのは楽しいし、毎日が充実しています」

そう言って笑うウルリだったが、そこで話を切るとちらりと御者のマリーに視線を送り、彼女に聞こえない大きさで問いかけてくる。

「アルフさん。彼女との関係について聞いてもいいですか？」

「まあ、気になるよな。だが、特別なことは何もない。彼女——マリーとは、縁あつて旅の護衛を引き受けたことで知り合つたんだが、その依頼が完了したあとも、お互いの利害の一致から行動と共にしているだけだ」

「俺はいらない誤解を与えないように、マリーとの間柄を依頼主と護衛の立場の延長と説明した。

「俺には浮いた話のひとつもないさ。それよりウルリの方こそどうなんだ？　あれからいい人でも見つけたか？」

マリーを保護者的な目線で捉えていた俺は、話題を変えるために逆に質問する。

「私ですか？　魔導士団長の話を辞退したあと、ちょうど騎士団長の打診をすっぱりと断つてきた

ドドムさんに城の出口でバッタリと出会つて。その足で一緒に酒を飲みにいつて愚痴ぐちを吐きだしたら、なんだかすつきりしちやつて……」

ウルリは手にした杖をくるくる回しながら、思いだすように話を続けた。

「それで、学校を建てたまゝ私の夢を打ち明けたら、コーヴの町の自治権をもらつたからそこに建てればいいと言つてくれたんです」

そう言うと、ウルリはドドムをちらりと見てから教えてくれた。

「そうして意氣投合した私たちは、そのまま結婚しちやつたんです。まあ、元より鍛冶師としてのドドムさんのことは尊敬していましたし、一緒にいるのも慣れていて楽でしたからね」

「そ、そなうなのか！　確かに旅の間もよく一緒に行動していたが、同郷じょうきょうだから程度にしか思つてい

なかつたよ」

「まあ、旅の時はそんな感情を持つ余裕はなかつたですからね。落ち着いたあとで改めて自分のこれからを考えた時に、たまたま気の置けない人が近くにいたつて感じですね」

あははと笑いながら話すウルリの頬が赤く染まる。

年齢的には一回りくらい違うが、お互いの気持ちが向き合つているのならば、そんなものは野暮やほな考えだ。ここは心から祝福をするべきだろう。

「それは、おめでたいことだな。幸せそうでよかつたよ」

「ふん。俺様が面倒を見ているだけだ。まあ、娘みたいなものだが悪い気はしない」

魔王討伐の時のガツガツした雰囲気はすつかりと影を潜めたドドムは、そう言って口角を上げるのだった。

「——さあ、ここがドワルゴ国^{くに}の国境砦だ。ここで捕まえた盗賊どもを引き渡してから、コーヴへ向かうことにしよう」

砦ではドドムたちが一緒だつたこともあり、問題なく通過することが出来た。

馬車一杯に積み込んだ盗賊たちを見て砦の門兵たちは驚いた表情を見せたが、ドワルゴでは英雄扱いであるドドムとウルリの顔を見ると、納得して二人を称賛しうさんし始めた。

「ずいぶんと人気者のようなだな」

盗賊の引き渡しも終わり、コーナーへ向けて馬車を走らせる俺たち。さらなる情報交換をするべく、二人には俺たちの馬車に同乗してもらうことにしていた。

「さあ、どうだろうな」

「二人とは魔王討伐直後に別れたので、エンダーラでの俺の遭遇については知る由もない。ドドムがそう言うのも当然のことだ。」

俺は特に言及もせず本題に入る。

「先ほども少し話したが、ダクトのギルドで聞いた話だとドワルゴ国へのマイルーン農業国からの物資が止まって大変だそうだな。実際のところどうなんだ？」

「ん？ ああ、その情報は間違ってはいない。ただ、ドワルゴ国もいろいろな国とのやりとりがあるから、マイルーン以外からも支援は受けている。だから、食料が足りていないのは、主に南に位置するコーナーやその近辺の村や町になる。だが、今回マイルーン方面からの輸送を邪魔していた盗賊どもを排除したから、徐々に回復するとは思うがな」

現在、コーナーの管理を任せられている立場のドドムは、そう言って苦笑いを見せる。傍で話を聞いていたウルリも頷いていた。

「——実は俺たちは二つの理由があつてドワルゴ国に来たんだ。一つは、ダクトのギルマスから

ワルゴ国行きの商隊が魔物や盗賊のせいで困っていると聞いたから。もう一つは、ドドムに頼みがあつたからなんだよ」

「お前が俺様に頼みごとだと？ なんだ？ 魔王でも復活しやがったのか？」

まあ、魔王の復活については冗談にはならない状況かもしれないが、今回は別の理由で訪れたので俺は素直に話す。

「いや、実は手持ちの剣が折れちまつて。そんな時、ドドムが鍛冶名人だったのを思いだしたんだ。それで、俺の剣を打つてほしいと思って訪ねてきたわけさ」

「はあっ？ お前は勇者の剣を持っていたはずだろ。まさかあの剣が折れたのか？」

「いや、あの剣は魔王討伐が遂行されたから、国の宝物庫に返納したんだ」

実際は国王に取り上げられたのだが、その経緯はマリーも知らないことなので誤魔化してしまう。「そりや律儀なことだな。まあ、また魔王が現れたら借りればいいわけだしな」

「ははは。その時はドドムが勇者をやってみるか？」

「はつ、馬鹿言ってるんじゃないねえ。勇者は特別な素質がなければあ無理だ。誰もがなれるわけじゃねえのは、お前が一番知っているだろうが」

「ははは、冗談だよ。言つてみただけだ」

「ちつ、笑えない冗談はよしてくれ。いいか？ 俺様はお前を勇者として認めているんだ。軽々しく誰かがやればいいとか言うんじゃないぞ」

認めている者に對しては敬意を払う、ドドムらしい返しであつた。

そういうするうちに、今日の野営ポイントへ到着する。ドドムが大きな声で、もともと連れていた馬車のメンバーに指示を出した。

「今夜はここで野営を行う。見張りの順番は偏りのないよう決めておくように！」

それから俺の傍に来て、申し訳なさそうに告げる。

「すまねえが、食事は各自で頼む。知つてのとおり廻馬車だったから、積んでいる食料は最低限でな。追加の食事まで準備出来そうにないんだ」

おそらく食料不足も影響しているのだろう。町の長であるドドムでさえ旅の食事を控えめにして

いるようだつたので、かなり不足しているのだと思われた。

そのあと、俺は野営時に、町で買い求めた大量の食料についてマリーと話し合うことに。

「どうも、俺たちが思つていた以上に食料不足は深刻のようだ。マリーの経験を積むために商売を兼ねてと思っていたが、どうやらそれどころではなさそうだ。それで提案なんだが……」

そう言つてから、俺の考えをマリーに伝えた。

「構いませんよ。こんな状況ですので、それで助かる人たちがいるのでしたら、そうするべきでしょう」

俺はマリーの決断に礼を言うと、ドドムたちが休むテントに向かう。

そこには携帯食と一杯の飲み物で休む二人の姿があつた。

「俺たちの持つてゐる食料について少し話があるんだが、いいか？」

「なんだ？ コーザでの商売の許可は出してやるから心配するな」

「いや、ドドムたちの話を聞いてマリーとも話し合つたんだが、俺たちの販売用の食料はすべてドドムに渡そうと思うんだ。もちろん、こちらも仕入れ値があるから無料とはいかないが、仕入れた金額と同額で構わないと考えている」

「何？ 商人が利益なしで品物を卸すというのか？」

「ああ、今回は特別だ。町同士の交易が止まつてゐるということは金の流れも止まつていてことだ。ハザードの交易品の鉱石が売れなければ、食料を買う資金も不足してゐるのだろう？」

「ちつ。町を治めたこともないような奴にそんな心配をされるとはな。だが、そのとおりだ」

「なら、この提案は受けてくれるよな？」

「……これは借りになる。何か返せるものを考えなくてはならねえな」

そう言つたドドムの隣で、ウルリがある提案をしてくる。それは、俺にとつてもありがたい提案だつた。

「恩を返すならば、アルフさんの剣を材料費のみで一振り打つて、お返しすればいいのではないですか？ もともとのアルフさんの目的はドドムに剣を打つてもらうことでしたよね？」

「ああ、そういえばそうだつたな。勇者が使う剣となると半端なものは打てねえが、久しぶりに腕

が鳴りそ�だ。すまねえが、それで貸し借りなしで頼む」

「いや、俺の方も助かる。ところで、食料はどこで渡せばいい？ ドドムたちの空いた馬車に出してもいいが。いや、傷みやすいものもあるから、町までは俺が収納に入れたまま持っていたほうがいいか」

「そうだな。アルフの収納にあるならその方がいいだろう」

魔王討伐時に収納魔法は見せていたので、ドドムたちは俺の話すことを理解してくれていた。

俺はドドムの了承を得ると、頷いてからマリーの元へ戻る。

そこでは、コトラやセイレンたちと食後のお茶を飲むマリーの姿があつた。

「話はついたよ。ダクトで仕入れた今回の食料については仕入れ価格で卸すことに決めた。卸の利益はないが、そのかわりに俺の剣を打つてくれることになった。この事実だけでも十分にドワルゴヘ來た意味がある」

「それはよかつたです。商売は買ってくれる人がいてこそ成り立つものですので、今回のこと�이次に繋がればいいですね」

マリーはそう言って笑顔を見せてくれるのだった。

3

「——ドドム様がお帰りになつたぞ」

「コーザの町へ着いた俺たちの馬車は、この町の管理者であるドドムが一緒だつたことで、すんなりと入ることが出来た。

その後、約束の穀物等の食料品を、ドドムの住む屋敷の庭に広げた。

「こいつは驚いた。アルフの収納に詰め込んできたと聞いたから、ある程度の量は期待していたが……予想以上だつたな。これだけあれば、主な配給先へ配ることが出来るだろう」

ドドムはそう言うと、すぐに部下に指示を出し、食料品の配給手配を始めた。

「さあ、今度は俺様が約束を果たす番だな。何か要望はあるか？」

食料の配給へ走る部下を見送ったドドムがそう問いかけてくる。

俺は折れた剣を取りだすと、彼に注文をつける。

「こいつは町の武器屋で買ったものだが、前の戦いで折れちまつた。これよりも頑丈な剣だとありがたいな」

「どれ、見せてみる」

ドドムは俺から折れた剣を受け取ると、音を聞いたりハンマーを打ち付けたりして、その強度を確認していく。

「材質は鋼が使われているから強度はそれなりのはずだが……どんな硬いものを斬ろうとしたんだ？」これ以上となるとミスリルとなるが、残念ながら今はこの工房にミスリル鉱石はないな

「そうか、そうなるとどこかで探してこないと駄目だな」

そう呟く俺に、ドドムはそんなことは気にするなど言わんばかりに告げる。

「まあ、心配するな。ここをどこだと思っているんだ。ドワルゴ国隨一の鉱山の町、コーナーだぞ。

ミスリル鉱石なんざ、ちよいと坑道に潜ればすぐに調達出来るさ。一緒に来てももらえるか？」

「一緒に行くのは構わないが、鉱石の採掘はやつたことがないから、力になれるかどうか分からないぞ」

俺の剣に必要な鉱石を採掘しにいくのだ。断るという選択肢はないが、採掘素人の俺を連れていてこうとするドドムに違和感を覚え、隣にいたウルリに問いかけた。

「ドドムが何か隠しているような気がするんだが、心当たりはないか？」

「え？ ミスリルが採掘出来る坑道ですよね？」確かに、あの坑道は魔物が大量発生したから、一時的に封鎖していたと思うのですが……」

「ははあ、なるほど。そういうことか」

「アルフの剣に必要な鉱石を採掘するのだから、露払いくらい担当してもらうのは当然だろ？」

だまし討ちをして俺を連れていこうとしていたドドムだったが、ウルリが暴露してしまったので開き直つて軽口を叩く。

まあ、どちらにせよ手伝うつもりだから問題ないが、最初からそう言つてくれたほうがありがたかつたな……。

「構わない。元は俺の剣に必要な鉱石採掘だ、魔物の相手くらいわけないさ」

「さすがは勇者殿。いや、坑道の中だとウルリの広範囲魔法はほとんど使えないし、俺も小回りを利かせる戦いは苦手だから、魔物の排除に手間取つていてな。まさか、坑夫に魔物退治をさせるわけにもいかず、泣く泣く封鎖していたんだ」

笑いながら答えるドドムは、工房の棚にある採掘道具の入つたリュックを背負い、身支度をする。

「じゃあ、行くか」

「今からか？」

「当然だろ。剣を打つにあたって、仮に今から採掘しても鉱石からとなると、金属の精製をしなきゃならん。それなりに時間のかかる作業だから、すぐに入れた方がいいと思うぞ」

そんなドドムの意見に俺は素直に従う意思を見せ、マリーに視線を向ける。

「マリーはどうする？ 聞いていたと思うが、坑道は魔物で溢れてるそうだ。危険もあるだろうからここで待たせてもらつても構わないぞ」

魔物相手なのでセイレンの精霊魔法はかなり有効だ。ただ、精霊は基本的に契約者のマリーの傍

にいる必要があるため、彼女の意思を確認したのだ。

「彼女は普通の商人だろう？ 連れていく必要があるのか？」

すると、セイレンの存在を知らないドドムが口を挟んでくる。

確かに、ただの商人がわざわざ危険な坑道へ出向く必要はないだろうから、彼の言葉は正論だ。だが、大森林の遺跡をセイレンと共に攻略してきたマリーは、出来るだけ俺と行動と共にしたいと考えていたようで、はつきりと答えた。

「私も一緒に行きたいです」

「おいおい、本当に大丈夫かよ？」

マリーの決断を聞いたドドムが本気で心配して俺を見る。

「彼女には頼れる相棒がいるからな」

俺はそう言つてコトラの傍にいるセイレンに視線を送る。セイレンは特に何も言うことなく、欠伸するコトラと共にのんびりしていた。

「まあ、アルフがそう言うなら信用するさ。こつちは俺様とウルリが向かうことになる。ちなみに、坑道の内部はあまり広くないから、威力の強い魔法は控えてくれ」

ドドムはそう言うと、ウルリに視線を送つてから先に工房を出たのだった。

「——ここだ。ちょっと待つてろ、封鎖している扉を開けるから」

工房を出て十数分ほど山手に登った場所に、坑道の入り口があつた。

中に魔物が出たので作業を中断し封鎖していたことだが、中はどうなつてているのだろうか。基本的に中は大きな道が奥へ向かつて掘られていて、所々に小さな道が延びて構造になっています。採掘は一番奥の大広間と呼ばれる場所で行いますが、途中の小道に魔物が潜んでいることがありますので、注意をお願いします」

ドドムが坑道の入り口を開放している間に、ウルリが坑道の内部事情を説明してくれる。

俺はついでに気になつていていたことを彼女に質問する。

「中の明かりはどうなつていてる？ 遺跡であれば光ゴケが蔓延はびこつていいんだろうが、人工的な坑道ではそれは期待出来ないだろう？」

「そうですね。坑道内の光源は魔石ランタンを使用しています」

魔石ランタンとは、魔石の魔力を動力源として明かりを灯す魔道具で、街灯にもよく使われています。

「どうか。だが、しばらく封鎖していたのだろう？ 魔石の魔力は残つてているのか？」

「それは、入つてみなければ分かりませんね。もしかすると、魔力切れで光魔法を使う必要があるかもしれません」

「どちらにしても入つてからの確認というわけだな」

俺がウルリから話を聞いていると、ドドムが坑道の入り口の封鎖の鎖を解いて戻ってきた。俺が

ちの会話が聞こえていたのか、光源について答えてくれる。

「封鎖した時期からするとまだ光源はあると思うぞ。もしもの時を考えて、交換用の魔石も準備してあるから心配するな」

忘れていたが、ドドムはこの町を管理する立場で、当然ながらこの坑道の責任者でもある。内部の情報に詳しいのは当たり前であろう。

そのままドドムは俺たちを入り口の前まで連れていく。

——ギギイ。

そして、鎖を解いた大きな扉を押し込むと、音を立ててゆっくりと開き始める。

入り口を長い間閉めていたからだろう、新鮮な空気が内部に入る反面、溜まっていた魔素が身体にまとわりつくように外気と混ざって馴染んでいく。

「この魔素の感覚、我慢が出来ない程ではないが、不快はある。これは内部に魔素溜まりが出来ていそうな感じがするな」

俺がそう言うと、ドドムが頷く。

「まあ、可能性は十分にあるだろう。魔物の報告があつて封鎖していたんだからな」

「となると、坑道内部の魔物排除に加えて、魔素溜まりの処理をする必要があるのか。面倒だが、早い方がいい。さつさと済ませて一杯やろうか」

俺は収納魔法から予備の安物の剣を取りだして戦闘の準備をすると、コトラを巨大化させてマ

リーを護衛するように指示する。

「コトラはマリーに近づく魔物の排除を。セイレンは魔素溜まりの調査を頼めるか?」

『ああ、あの不快なものか。この狭い坑道は人間には動きづらいからな。いいぞ、引き受けよう』マリーの肩に止まっていたセイレンは、そう答えるとふわりと宙に舞い上がり、坑道の奥へと姿を消した。

「精霊鳥は魔素に敏感だからな。セイレンなら問題なく探し当てるだろう」

「こいつは驚いた。アルフは精霊鳥まで従えていたのか」

セイレンに頼みごとをした俺を見て、ドドムが驚いた声を出す。

「いや、セイレンはマリーの契約精霊になる。マリーが傍にいるから俺の言葉でも頼むことが出来るんだ」

「ほう、彼女は精霊使いか。そいつは珍しい能力だ。精霊鳥を大事にするんだぞ」

ドドムはマリーにそう言うと、坑道の中へと足を踏み入れたのだつた。

「——予想通り、魔石ランタンはまだ魔力切れを起こしていないようだな」

坑道に入つて周りを確認すると、規則的に配置された魔石ランタンの光が坑道内を照らしていた。「ヒューマの奴がいたら楽だつたんだがな。こういつた場所の探索は奴が一番上手いからな」

「まあ、ヒューマ程ではないが、俺も探索魔法は使えるんだ。それにここは迷宮なんかじやなくて、

ドドムのよく知っている坑道だろ？ 魔物の気配だけに気を付けていたら問題ないはずだ」「まあな。だが、探索魔法だけは頼むぞ」

ドドムはそう言って、無警戒に奥への道を歩いていく。とてもではないが魔物の潜む場所を歩く姿には見えなかつた。

「——その右にある小道。奥に魔物の反応があるぞ」

「ん？ 右か？」

俺が探索魔法にかかるたゞ反応を先頭を歩くドドムに伝えると、彼は臆することなくその小道に進む。

「当然ながら襲つてくる魔物を自慢の盾で軽く受け止める、俺に声をかけてくる。

「後始末を頼む」

それを聞いた俺はサクッと魔物を切り捨てるのだった。

こういつたやり取りを十回ほど繰り返した頃、俺たちは大きく開かれた空間に辿りついた。

「ここが、ミスリル鉱石の採掘が出来る現場だ。今から俺は作業に入る。邪魔する魔物が出たら排除を頼むぞ」

「ああ、分かった」

ドドムは背負つている鞄から採掘用のピッケルを取りだすと、ジッと岩壁を確認しながらピッケ

ルで軽く叩いて歩く。返つてくる音で材質を判断しているようだ。

コンコンコン。

ドドムの歩みは止まらず、同じような音が坑道内に響き続ける。

そうしてたつぱり三十分ほど確認した時に、ドドムがため息と共に告げる。

「今までならここで見つかったものだが、今日はどこを探してもミスリル鉱石が見当たらねえ。となると、封鎖する直前に掘っていた穴の先を見てみるしかないな」

坑道内を詳しく知つてゐるドドムが見つけられないのだ。やはりミスリル鉱石は希少な鉱石なのだと再認識させられる。

「そういえばセイレンもまだ戻つてきていしないな。この先の坑道は長いのか？」

「まあ、それなりの距離だな。気を付けろよ。もともとはその現場で坑夫が魔物と遭遇したのが始まりだつたからな」

ドドムは手にしたピッケルを鞄に入れ込むと、盾を手に目的地へ続く道へと歩き始める。

「——おい。こいつは……」

先頭を歩くドドムが異常に気付き、声を上げる。同時に俺も魔法を唱えていた。

「水球」

「おい。そんな水魔法をこんなところで使つてどうす……」

魔法の意図が理解出来ないドドムが非難めいた言葉を口にしかけたが、途中で周りの変化に驚い

て俺を見た。

「こいつは以前、大量の魔素を回収する目的で開発した魔法なんだ。これで少しは気分がよくなつただろう?」

坑道の奥へ進む度に魔素濃度が上がり、不快感が跳ね上がっていたのだ。

「きっとこの先に魔素溜まりに関係するものがあるはずだ。先に向かつたセイレンの姿がないのが心配だ。急ごう。この先は一本道か?」

「ああ、そうだ。ここを抜けた先に広めの空間がある」

俺はドドムから情報を聞くと、彼の前に出て魔素を吸収する魔法を使いながら進む。すると、急に視界が開けた。

その空間にある魔石ランタンの光は、魔素が多い空間のためか、他のそれよりも暗く重たい光となつてぼんやりと中を照らしていた。

『――ようやく来たか。遅いぞ』

入り口近くの突きだした岩の上で羽を休めるセイレンが、愚痴のように俺を咎める発言をする。もしかすると、魔素の量が多すぎるせいで行動に制限が出ているのかもしれない。

「すぐに魔素の濃度を下げてやるから待ってる」

俺は空間の真ん中あたりに特大の水球を作りだし、中にある魔素濃度を下げる。するとその瞬間、セイレンが俺に向けて魔法を放ってきた。

「うおっ!? 何をするんだ!」

呪嗟に躰した俺は、セイレンに向かつて抗議の声を上げた。が、次の瞬間。俺の後ろの壁^{じが}が動いたのが分かつた。

〔ロックバッド〕

「岩蝙蝠かよ!」

ここまで来るのに集中力を必要とする特殊な水魔法を使用していたため、探索魔法を展開していなかつたのが仇^{あだ}となつたようだ。天井に張り付く多数の岩蝙蝠の存在に気付けなかつたのだ。

バサバサバサ。

普通の岩蝙蝠単体ではそれほど脅威^{きょうわい}にはならない。しかし、今回はその数が多い。

そして、一番厄介なのは、魔素溜まりにいたことにより、そのすべてが魔物化している可能性が非常に高いということだ。

「こいつらは炎に弱いが、こんな狭い空間で高威力の炎魔法を使つたら、息苦しくてこっちが倒れてしまふ可能性が高い。ならば……」

俺がセイレンの精霊魔法に頼ろうとした瞬間、俺たちの後ろに控えていたウルリが叫んだ。

「皆、目を瞑つて下を向いてください!」

ウルリの言葉に俺は呪嗟に後ろに飛びすさり、マリーの顔を俺の胸に押し付けながら、自分は目を瞑る。

目を強く閉じていても周りが明るく光るのが分かるほど輝きを持つ魔法が、空間を埋め尽くす。それは、ほんのコンマ数秒の世界。すぐに暗くなる。

次の瞬間、ドサドサと岩蝙蝠の落ちる音が聞こえた。

「岩蝙蝠は気絶しているだけですので、トドメが必要です！」

ウルリの言葉に俺は通常の光魔法を天井に向けて放ち、一時的に視界を確保する。

そしてすぐに次の魔法を放つ。

〔重力圧縮〕
〔グラビティ・プレス〕

炎魔法が選択肢から排除された状態で、地面に落ちた岩蝙蝠を一網打尽に出来る魔法は限られている。俺は迷わずこの魔法を選択した。

地面で気絶していた岩蝙蝠たちは、抵抗することなく重力魔法でその羽を潰され、一度と舞い上がる事が出来ない状態になつた。

〔全部片付いたか？〕

俺は念のために剣で一羽ずつトドメを刺して回りながら、あたりを確認して皆に声をかける。

「どうやら大丈夫そうだ。しかし、魔素溜まりの原因はなんだつたんだ？」

やれやれといった表情で、ドドムがぼやくように言う。

俺はその言葉を受け、先ほどセイレンが攻撃した壁を見て答えた。

「こいつを見てみろ。瓦礫の中に真っ黒な石があるだろう。おそらくこいつが原因だろうな」

俺はその石を前に、万が一を考慮して手で触ることなく鑑定魔法を発動させる。

「こいつは驚いた。この石みたいなものは古代の魔道具らしい」

「なんだと？ これが魔道具だというのか？」

「ああ、そうだ。なぜ、こんな地下に埋まっていたのかは不明だが、この魔道具が周りの魔素を吸収しては増やして吐きだす、という役割を果たすことで、魔素が坑道という狭い空間を埋め尽くしていったようだ」

俺は正体が分かった魔道具を拾いあげると、収納魔法へ仕舞い込んだ。

「この魔道具は、使い方ひとつで魔物を作り放題となりえる危険なものだ。この場に放置するわけにはいかないから、しばらくは俺が預かっておくとするよ」

「ああ、問題ない。それよりもこの岩蝙蝠の死骸しがもどうにかしなきやな。このままだと坑夫も嫌がつて作業を拒否するだろう」

「なら、俺が片付けておくよ」

ドドムのため息交じりの言葉に俺はそう答えると、死骸を収納へ入れていく。

生きていれば収納には入れないので、確実に死んでいるかの判断にもなつて一石二鳥だ。ほんの数分ほどですべての死骸を片付けた俺は、次に魔素をたっぷり吸い込んだ水球魔法も収納に入れる。

魔法で作つたものを収納魔法に入れる発想はドドムたちにはなかつたようで、魔法知識に長けているウルリも目を丸くしたのだった。

——カンカンカン。

魔物の排除が完了したので、ドドムが鉱石の採掘を始める。

その様子を興味深そうに覗き込むマリーを横目に、俺はウルリと話をしていた。

「コーザには美味しい地酒はあるのか？」

「お酒ですか？ 本当にドドムさんといい、アルフさんといい、どうしてこんなにお酒が好きなのでしょうかね？」

すっぽりと深く被つていたフードを外して、笑みを見せながらウルリが言う。

この調子だとドドムの酒豪ぶりは相変わらずなのだろう。

「食堂で振る舞われるのはエールくらいのものですよ。鉱山の町と呼ばれているだけあって鉱石はごろごろ出できますけど、食料関係のほとんどは別の地域からの交易で賄つていますから」

「そうか。ならば、ドドムが無事に仕事を終えたら、俺が各地で買った酒を振る舞うとしよう。少し前にヒューマの村でも喜ばれていた酒だ。きっとドドムも喜んでくれるだろう」

「そうですね。でも、仕事よりも先に見せたら駄目ですよ。きっと先に飲ませろと言つて駄々をこねるでしょうから」

酒が飲みたいと駄々をこねるドドムを想像すると、確かにウザい場面しか思い浮かばない。

ウルリの忠告どおりに、すべてが終わってから礼として出すことにしようと俺は決めたのだった。

「うおっし。これだけあれば剣の一本や二本、楽に作れるだろう」

俺たちが警戒を続けながらも話していると、ミスリル鉱石の採掘を終えたドドムが、ピッケルと鉱石の入った袋を持って戻ってくる。

「もういいのか？」

「ああ。必要分は採掘出来たからな。明日にも再度内部の調査をして問題なければ、鉱石の採掘を再開させるつもりだ。それさえ出来ればミスリル鉱石も採れだすから、今無理する必要はない」

ドドムはそう言って鉱石の入った袋を肩に掛けて、出口へ向かう。

その顔には、目的の鉱石が採掘出来て満足したことが分かるような笑みが浮かんでいた。

坑道を抜け、無事に工房へ戻つたドドムは、すぐにミスリル鉱石の精製に入った。

「おい、少し休んでからにしたらどうだ？ 俺もそれほど詳しくはないが、鉱石の精製は時間のかかる大変な作業だったはずだ」

「俺様に休みなんていらないさ。しかし、よく知っているじゃないか。売ることしか考えてない商人の中には、鍛冶職人は武具さえ作れればいいと思っている奴もいるが、本当に重要なのは鉱石の精製作業がちゃんと出来るかどうかだ。いくら剣を打つ技術が高くても、素材が不純物だらけでは碌なものは出来ない。この町の鍛冶師は弟子にまず鉱石の精製から徹底的に教え込む。だからこの町の武具は質が高いんだよ」

魔王討伐の旅の間、俺様気質のドドムとはよく意見の齟齬そごがあつたが、こうして鍛冶職人としての姿を見るとその頑固さも大事なものだと納得した。

「いい機会だ。本来ならば弟子にしか見せない作業だが、特別に鉱石の精製作業から見学させてやるよ」

久しぶりのミスリル加工に気分が上がっているのだろう。ドドムは上機嫌で俺を鍛冶場へと誘う。「本当にいいのか？　ドドムの技術を盗んで、俺が鍛冶師の商売敵しょうばいがきになるかもしれないぞ？」

「がつはつは。一度や二度見たくらいで盗まれるような技術じやねえよ。それにアルフが鍛冶師を

やる姿はまったく想像出来ねえ。まあ、酒の肴さかなにでも出来るようによく見ておくことだ」

ドドムは口角を上げて笑うと、ウルリに声をかける。

「俺とアルフはこれからしばらく工房こうぼうに籠ることになる。すまないがそっちの彼女はウルリに任せてもいいか？」

「はい、大丈夫ですよ。こつちは任せていいものを作つてくださいね」

ウルリの返答に満足したドドムは、俺の背中を押すようにして自慢の工房へと入つていったのだった。



その後、ドドムとアルフが鍛冶場に入るのを見届けたウルリは、傍にいたマリーに声をかける。「マリーさんといいましたよね？　二人は鍛冶場に行つてしましましたので、しばらくは出てこないでしょ。折角ですので少しお話でもしませんか？」

「は、はい。こちらこそよろしくお願ねがいします」

ウルリからの誘いに、マリーは緊張した様子を見せながらも頷いた。それを見たウルリは優しい笑みを浮かべながら居間へとマリーを案内した。

「この度は、多くの食料を届けてくださりありがとうございました。おかげでマイルーンとの交易が再開されるまでのつなぎになりました」

ウルリは町の管理者であるドドムの妻として、商品を卸してくれたマリーに再度お礼を言って頭を下げる。

「いえ。今回の件はすべてアルフさんの提案なのです。私は彼の話に同意しただけですのです……」「そうだったかもしれません、商人であるマリーさんが一緒であったがために思いついたもの